

サイエンス・グランプリ 学校賞受賞

関東及び山梨県、静岡県の小中学生が参加する科学作品コンクール「サイエンス・グランプリ」で、県内で優れた作品を出品した学校に贈られる「学校賞」を西深井小学校が受賞しました。(県内3校)



また、全国小学校理科教育協会サイエンス賞千葉県地区部門3名のうち、市内から、森廉太郎さん(流山北小)、高橋真理菜さん(向小金小)の2名が選ばれました。テーマは、森さんが「種もみからお米になるまでパート2」、高橋さんが「環境にやさしい電気の作り方に関する研究パート3」です。ひとつのテーマに継続して取り組んだ成果が受賞に結びつきました。

冬の寒さに耐えて育っています

昨年度から今年度に向け、緑あふれる環境づくりのため、市内の小中学校に榆【ニレ】や桂【カツラ】の苗が植樹されました。どの学校でも丈は1m位で、幹の部分でもまだ小指ほどの太さですが、冬に耐えてしっかり根付いています。細い枝の先端に小さくけなげな新芽が陽光を浴びていました。ニレとカツラは二種類とも落葉樹で、新芽が出る前に赤紫のとてもしゃな花を咲かせます。秋には明るい黄色に紅葉します。特に桂の落ち葉はキャラメルに似た甘い香りが漂います。どちらの木も年を経れば高さが30mの高木に育つそうで、長い目で成長を見守っています。



自信の作品が国揃い

第13回東葛飾地方家庭科、技術・家庭科作品展

1月14日(金)～16日(日)に、さわやかちば県民プラザにおきまして、近隣6市の児童生徒の家庭科、技術・家庭科の作品展(700点)が開催されました。流山市からは、小学校45点、中学校32点を出展しました。

厳しい寒さの中でしたが、約1,300名もの来場者がありました。来場者からは、「小中学生の作品とは思えないすばらしい作品があって驚いています。将来が楽しみです」と好評をいただきました。



教育トピックス

金メダリストにマット運動を教えてもらったよ!



12月3日、流山幼稚園で、アテネオリンピックの体操団体金メダリストの米田功選手を迎え、スポーツ教室が行われました。

これは、文部科学省が実施している「スポーツ選手活用体力向上事業」に流山幼稚園が応募し選ばれたものです。保護者の方々が見守る中、年長組の28名を対象にマット運動の指導が始まりました。

前回り、後ろ回り、側転と子どもたちはみるみる上達していききました。また、米田選手の模範演技に歓声が上がりました。最後に園児一人ひとりに金メダルを掛けてもらい記念写真を撮りました。

子どもたちの記憶が薄れても写真を見るたびに流山幼稚園での思い出としてよみがえることと思います。



かしながら今回接した韓国の若者達は皆とても好感のもてる人柄で、受験教育の歪みのようなものを感じることは、全くありませんでした。この研修では、教育のやり方に「絶対、はない」ということに気づけたことが一番の収穫でした。より多くの選択肢の中から、新しい教育の形をつくっていくことが大切だと強く感じました。



韓国見聞録

～日本教員訪韓研修団に参加して～

八木中学校教諭 木藤 潔

昨年の11月に韓文化交流基金主催の日本教員訪韓研修団に参加させていただきました。韓国の小中高校、大学を訪問し、小学校の低学年から行われているネイティブスピーカーによる英語の授業、すべての教室に電子黒板が設置されるなどの充実した学習環境、そして学習に特化した教育カリキュラムと、日本の学校現場とは違った姿を目の当たりにしてきました。そして何より驚いたのは、中学生の圧倒的な勉強量です。公立の一般的な中学校でも一日7時間授業の後、自習と補習で夜8時まで学校で勉強するのです。「僕の中学校時代の記憶は勉強しかないんですよ」という通訳の若者の言葉がとても印象的でした。大学入試に遅刻しそうな受験生をパトカーで誘導し、聞き取りテストに支障がないように、騒音の大きい飛行機は飛ばさないというこの国の教育熱の高さを実感しました。し

教育広報

真 まごころ 心

題字 鈴木 昭夫

第50号
編集発行 流山市教育委員会
TEL 04(7158)1111



苦労やがまんが価値ある学びに

教育長 鈴木 昭夫

早いもので、暦が変わって1ヶ月余りとなります。つくばエクスプレス開通後、周辺地域が、大きく変貌しています。子どもも大人も各々に異なる背景を持ちながらも、豊かな「まち」にと願っております。

真の「豊かなまち」とは、「人のつながりが実感できるまち」のことだと思います。私たちの国は今、歴史の大きなうねりの中、高度経済成長を続けてきた時とはあまりにも異なる状況下にあります。交通も伝達手段も買い物も全てにおいて便利になりましたが、「無縁社会」に象徴される、人同士のかわりの希薄さによる出来事が頻発しております。そして、少子高齢化社会の到来や、それとともに数少なくなってきた若い世代が抱える課題は、枚挙にいとまがない有様です。

国民の多くが、何か全てのことに内向きになったり、自分のこの生活にのみ、エネルギーを費やしたりしている感を強くしています。そんな中、ニュースになったタイガーマスクの行動は、それとは異なる灯ともいえるでしょうか。

2011年、この新しい年を大変な時代「不具合な時代の到来」と思うか、それとも全ての「出発点と位置づける時代」と考えるか、ある意味では、そのとらえかたで人としての根本が問いかけてきている年だと思います。

今、流山の小中学校は「真心教育」に力を尽くしています。15歳までの子どもを預かる学校は、社会に育つ子どもたちの最初の組織であり社会です。そこは、多少の「いきかい」があっても安心していられる場所であることを目指します。家庭と同様、学校もまた、根底に必要なのは、「安らぎ」であり、そのことが学び、活動する根源となると考えています。

めざす「真心教育」は、礼節、誠実、忍耐、孝行、公共心等を育むことにありますが、若いときにこそ、もっと苦労してみることを価値ある教育として位置づけたいと思います。

グローバル化著しい今に生きる子どもたちを大切にすることこそ、大人もともに一歩踏み込んでいく、そんな行動が求められると思います。

流山の23校全ての小中学校が「誇りある学園づくり」に取り組んでおります。算数や英語など教科で、あるいは環境の教育や文化・体験活動できらりと輝くものが形成されてきています。地域の皆様のご支援と、教職員の結集によるところが大切です。教職員の研修、家庭の教育力、優れた地域コミュニティーは、常に子どもがたまたなく楽しく取り組み、かつ、未知なるものや困難に挑む力を育てる大もとになります。

人間形成上の15歳までののはじめの時期は、やがて花咲くための「根っこ」が形成される時、引き続きのご支援をお願いする次第です。

誕生 281名の子ども司書

— 学校子ども司書認定証授与式 —

読書活動を推進する中心となる子どもたちを育て、校内で読書の楽しさを広めるために、市内全ての小学校で「子ども司書講座」が実施されました。2月3日(木)には、第3回の講座が実施され、「子ども司書のいる学校を表す認定証」が手渡されました。

この講座では、専門家である市立図書館司書の方が各小学校を訪問します。子ども達は、自校の図書室で、図書の分類の仕方や展示、整理の仕方を学びました。今年度の「子ども司書講座」はこれで終了となり、市内に281名の子ども司書が誕生しました。認定証を受けとった子ども達からは、「6年生で卒業も間近なので、後輩に学んだことを伝えていきたいです。」という声も聞かれました。それぞれの学校で、素敵な図書室作りが進められることと思います。

読書の輪を大きく広げていけるような「子ども司書」の活躍を期待します。

